

乳幼児期の子育ての大切さ

「樹木の

根っこ」

この時期の大切さはよく「基礎の部分」にたとえられます。どちらも土台となる部分がしっかりしていないと太い幹も枝葉も育たずに、倒れてしまいますね。人間も同じで人格形成上乳幼児期は土台の部分にあたり、この時期に人間として必要な愛情や手をかけてもらうことを親から十分受けないと、後々子供たちが困ったり心配な点が出てきます。

乳幼児は、

言葉

で自分の思いを十分伝えることはできませんから、親が子どものつたない言葉、表情、動作などから要求を読み取って満たしてやることがとても大切です。例えば赤ちゃん時代。赤ちゃん

は泣くことで自分の要求を訴え、泣きかたで親は直感を働かせ何を求めているか判断し、やさしく言葉かけしながらおしめを替えたり、ミルクを飲ませたり、抱っこしたりなど要求を満たしてやります。親は自分のことは後回しにし、まずは、心と手をかけて赤ちゃんの世話をします。これが「無償の愛」といわれる行為です。全面的に親に受容されることを経験した赤ちゃんは安心し、親への信頼感が育っていきます。この信頼感の育ちが親以外の他人を受け入れる力となり人間関係の出発点となります。このように親が子どもの気持ちを受け止めてこたえてやる心を忘れずに向き合っていくと、今後より良い親子関係が保てることでしよう。

幼児期

に入ると自立して

生きていくために必要な排泄、食事、着脱衣、睡眠、生活リズムなどの基本的な生活習慣や善悪の判断などを教えていく時期となります。

これらを身につけさせるためには、毎日根気強く穏やかな気持ちで「やって見せ、一緒にやって、やらせてみて、できたらほめてやる」「子どもが理解しやすい言葉で言うて聞かせる」「叱る時は真剣に、良いところは大いに褒める」精神で習慣化するまで繰り返し教え見守ることが大切です。毎日

のことですので親の思うように動かなかつたり、言うことをきかない時もありま。これも子どもならではの。これくれぐれも親の思い通りにならないからといって叩いたり蹴ったり暴言を吐いたり、面倒だからとほったらかしにしたり、無視しないでください。しつけどころか子どもの心は傷つくばかりで荒れてきます。習慣も身につけません。ここはまず親は心を落ち着かせ、状況にあわせて待つことも必要ですし、わかりやすい言葉で親の気持ちを伝えてみましょう。

親から

大切にされる10分

をにかけて育てられた子は、これからやってくる集団生活でも困らずに自分の力を発揮することができます。

愛情を注ぎ子どもを育てるということは、どんな仕事よりもすばらしい仕事です。心をこめて手をかけてゆつたり子育てしましょう。

児童相談員 松田 真枝

